巻頭言

トランスレーショナル研究・実用化研究の推進をめざして

三島和夫
国立精神・神経医療研究センター

本年の日本時間生物学会学術大会（第17回）を11月20日（土）、21日（日）の両日に開催することになりました。会場は柴田重信理事のご厚意により早稲田大学の国際会議場・井深大記念ホールをお借りできました。久しぶりの週末開催ですし、また都心の便の良いところにありますので、会員の皆様の奮ってのご参加をお待ちしています。開催概要は本誌に掲載されています。大会HP（http://www.sleepmed.jp/jsc2010/index.html）も合わせてご参照ください。

本大会のテーマは「トランスレーショナル研究・実用化研究の推進をめざして」として、大会長枠として同名のシンポジウムを企画しました。トランスレーショナル研究とは名前の通り基盤から応用への橋渡し研究であり、基盤研究で得られたシーズを臨床に展開する実用化研究を意味します。基礎と臨床の研究者の融合を進めようという機運は決して最近になって出てきたものではありません。1994年に生物リズム研究会と臨床時間生物学研究会が合流して日本時間生物学会が発足した主旨がまさにそうでした。本学会はその後17年目を迎えましたが、その間にも時間生物学の基盤研究はめざましい進展を遂げ、臨床研究者はその成果に迅速かつ容易に触れることができるようになり、また基礎・臨床研究者間の相互交流も進みました。実際、基盤研究の成果を一般生活や実地臨床に還元する試みがなされており、応用範囲もヒト生物時計の機能評価、性差・発達・老化などに関連する生活支援のほか、生活習慣病やうつ病、概日リズム睡眠障害など生物リズム障害に起因する疾患の診断や治療と幅広く行われています。しかしながら、質の高い実用化研究を行うには、被験者のリクルートと選定、試験デザインやエンドポイントの設定、試験実施のコーディネーターの援助、倫理的問題の解決も含めて幾つものハードルがあり、資金面でも制度的にも我が国ではサポート体制が整っていないのが現状です。本シンポジウムでは現在進められているトランスレーショナル研究の幾つかの取り組みを紹介するとともに、実用化研究を進める上での課題についても論議したいと考えています。

本大会では、特別講演、教育講演のため、Prof. Francesco Benedetti（Scientific Institute and University Vita-Salute San Raffaele, Milano, Italy）とProf. Serge Daan（University of Groningen,The Netherlands）を招聘しました。Benedetti教授はうつ病の時間療法の第一人者であり、断眠、光療法、睡眠相調節による画期的な成果を上げています。本大会では同療法の作用メカニズムに関する基盤研究と合わせて、うつ病と時間生物学の接点について興味深い話が聞けるものと期待しています。Daan教授は皆さんよくご存じですが、学会時期にちょうど来日中のところを本間研一先生のご厚意によりご紹介いただきました。また、本大会からの新しい試みとしてシンポジウム（一般枠、若手枠）の企画を公募しました。多くの企画提案をいただき、プログラム委員会による選考の結果、魅力ある幾つものシンポジウムを立てることができました。改めて感謝いたします。また、米国でご活躍中の山崎晋さん（Vanderbilt University）と下村和宏さん（Northwestern University）にもご参加いただき、最近の成果を紹介していただきます。

日本時間生物学会での発表演題数（単独開催時、ポスター）はこの数回100題前後で推移し、伸び悩みの感があります。また、臨床系の演題数は全体の２～３割を占めるに過ぎず、基礎と臨床の両輪で時間生物学を牽引するのに心許ない印象です。トランスレーショナル研究を推進するための人材育成や相互交流、リソースの整備は時間生物学を活性化する上で欠かすことのできない課題であると考えます。関係各位による議論を期待するとともに、本大会での討議がその一助になれば幸いです。改めて多くの会員の皆様のご参加をお待ちしています。